

地域の身近な畑を生かした農業体験学習 ～ヤッホー農園活動～
熊本県菊鹿町立内田小学校

学校 の 概 要

学校規模

学級数：10学級(内特殊学級2学級)

児童数：128名

教職員数：17名

体験活動の観点から見た学校環境

菊鹿町は、熊本県の北部にあり、九州山地の一角をなし、大分・福岡の県境に位置する。溪流内田川が流れる豊かな自然に囲まれ、実りの多い田畑が広がる。

人口は約7千6百人で、過疎化の傾向にあり、高齢者の割合が高い。

学校は、山の裾野に位置し、校区は広く、九つの区に分かれ、6kmの道程を歩いて登校する地区もある。他に2年生まで通う分校を二つ有している。

地域の人々は、昔ながらの温かな人情と教育熱心で進取の気性がある。地区対抗のスポーツ大会や地区独自の活動も盛んで、地区毎のまとまりがある。

児童にとっては、素晴らしい環境にあるが、児童の生活は家庭と学校を往復するだけのことも多く、身近な畑で土いじりしたり、自然とふれあったりする経験が少ない児童も多い。

連絡先

〒861-0414

熊本県鹿本郡菊鹿町大字上内田561

電話：0968-48-9021

FAX：0968-48-9910

ホームページ：

<http://www2.higo.ed.jp/es/utidaes/>

電子メール：

utidaes@edu-c.pref.kumamoto.jp

体 験 活 動 の 概 要

活動のねらい

地区毎の畑での生産活動を通して、総合的に学習することで、児童の知徳体の育成を図り、本物の人づくりを進める。

主な活動内容・方法

地区毎による全学年児童による農業体験活動、年間35時間の教育課程内活動

3年生以上は、総合的な学習の時間、1・2年生は生活科の時間として活動

活動地は、校区の九つの行政区にそれぞれ確保した農園(面積は、各地区で異なるが約2a程度)や公民館分館等

活動は、月に1回程度の農園活動日に午前か午後、3時間程度活動

各地区毎に児童の年間計画をもとに育てたい野菜を決め、栽培・収穫。収穫物は、地域にプレゼントや販売、調理して食したりする。

11月の収穫祭では、全区あげて学校に収穫物等を持ち寄り販売等をする。

地区の児童の実態に応じて、農園指導者の指導や保護者の協力がある。

体制等の工夫

地区毎に、区長・分館長・農園指導者PTA研修委員と連携を取りながら活動
ヤッホー農園地域連絡会議の設定

(全地区のヤッホー農園関係者会議)

緊急連絡体制でオフトークの活用

活動の成果

子供たちに主体性が育ち、生き生きとしてきたこと

畑が各地区と学校を結ぶ場になり、地域の活性化にもつながってきたこと

1 活動に関する学校の全体計画

(1) 活動のねらい

ア 知の総合化と主体性の育成

一連の農業体験活動の中で、各教科で学んだことを生かしたり、活動で体験したことを教科に返したりすることで知識の融合化を図ると共に、計画・実践・反省といった繰り返しの体験を通して主体的に活動できる児童を育成する。

イ 道徳性の育成

異学年間の活動や地域の人々との交流、自然とのふれあい、収穫までの様々な活動を通して児童のあらゆる道徳性を高める。

ウ 体力の向上

汗して働く活動を通して、勤労生産の苦勞と喜びを体験し、粘り強く働く心身共にたくましい児童を育成する。

このように本校の農園活動のねらいは、単なる農業体験だけでなく、知徳体の育成を図って進め、将来、様々な職業につくときの土台となり、未来を支える人材の育成にある。

(2) 全体の指導計画

ア 活動の名称

「ヤッホー農園活動」

イ 実施学年

全学年

ウ 活動内容

・ 勤労生産に関わる体験活動

児童の計画に基づいて、汗水たらしながら主体的な種まき、継続的な手入れ、収穫、収穫物の加工、販売等の体験

・ 交流に関わる体験活動

農業体験の中での地区の1年生から6年生までの異学年間の交流や農園指導者をはじめとする農園協力者、野菜の販売やプレゼントを通じた地域の人々との交流

・ 自然と関わる体験活動

農園活動での畑を通じた自然とのふれあいや作業のゆとりの中で地域の自然と親しむ体験

エ 教育課程上の位置付け

(ア) 全校一斉の活動は、普通日の教育課程の中で、午前か午後3時間程度活動する。

(イ) 活動の位置付けは、3年生以上が総合的な学習の時間に、1・2年生は生活科の時間に位置付ける。

(ウ) 地区毎に臨時的に必要な活動では、放課後を利用する。また、夏休み等の長期休業日時の活動は、各地区の子ども会活動の一環として活動する。

オ 実施期間(日数や時間数)

(ア) 日数は、月に1回程度、全体で15日分の一斉活動日を設定している。これ以外に、地区によって臨時で入る活動がある。

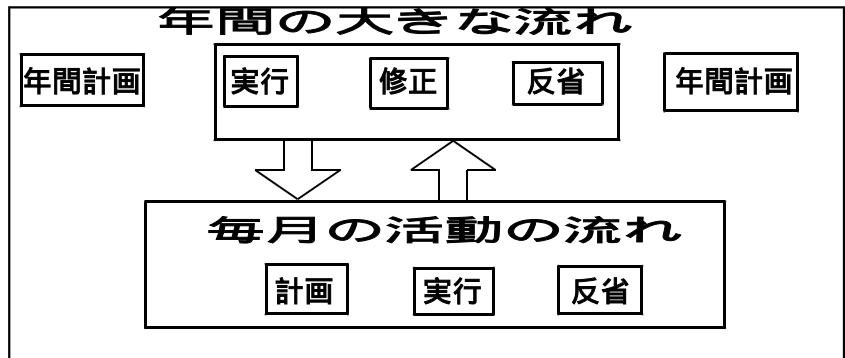
(イ) 時間数は、全校一斉の活動は、3年以上が総合的な学習の時間として、1・2年生は生活科の学習として、それぞれ35時間確保して活動する。

カ 活動場所

地区毎の活動計画に従って、地区の畑や公民館分館，分校等に移動して活動する。

キ 継続の状況

13年度から始まった活動で，12年度の3月に立てた地区毎の年間活動をもとに，4月から取り組んでいる。実際に活動を踏まえ，計画を適宜改善しながら活動を続けている。14年度は，13年度の反省をもとに活動を続けていく予定である。



2 活動の実際

本活動は，単発的な体験活動ではなく，下図のような長期間に渡る計画・実行・反省の継続的な活動であるが，ここでは，その部分である毎月の地区別農園活動の進め方を例に紹介したい。

(1) 事前指導

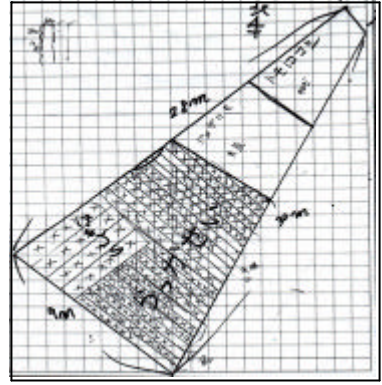
毎月の地区別農園活動を進めるに当たっては，下図のような各地区毎に作成した年間計画表に基づいて，6年児童が中心になり，農園指導者の助言を受けながら，具体的な計画案を練った。計画は，農園活動の前日に地区の他の児童に連絡し，活動内容や準備物について最終打ち合わせをして，農園活動日に備えた。

9 区 ヤッホ - 農園 年間活動計画

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
農園活動時間	ヤッホ - 農園 4/16(月)後	ヤッホ - 農園 5/19(土)	ヤッホ - 農園 6/16(土)	ヤッホ - 農園 7/7(土)		ヤッホ - 農園 9/14(金)後 10/13(土)26(金)後	ヤッホ - 農園 11/16(金)後 17(土)	ヤッホ - 農園 感謝祭 2/15(土)				ヤッホ - 農園 年間反省と計画 4日(月)後 7日(木)後
さいばい計画	やまいも							収穫				
	じゃがいも		収穫	さつまいも					収穫			
	さといも							収穫				
	とうもろこし			収穫								
	きゅうり					収穫	にんじん					収穫
	ミニトマト					収穫	だいこん					収穫
		ピ-マン			収穫	いちご						収穫
その他活動			川遊び	ミニ収穫祭	川遊び	ミニ収穫祭		収穫祭準備 ゲーム	収穫祭 感謝祭 バザー			ミニ収穫祭
お願い計画	植え方 作り方 水やりのこと 鳥の対策 うねの作り方	植え方 作り方	収穫の仕方 さつまいもの植え方		収穫の仕方	収穫の仕方	植え方 育て方	収穫の仕方 保存の方法				収穫の仕方
農園以外の活動	(水曜下校時)	草取り	草取り	草取り	草取り	草取り	草取り	草取り	草取り	草取り	草取り	草取り
必要な道具等	くわ スコップ 軍手 水やり 肥料 石灰	くわ 軍手 スコップ	くわ 石灰 スコップ 作物入れ 軍手 肥料	軍手 作物入れ		くわ 肥料 スコップ 軍手 石灰	軍手 作物入れ				軍手 作物入れ	軍手
その他行事	・歓迎遠足						・継続遠足	・伝承道具 ・収穫祭	・学習発表会			・国際交流会

なお，実際の農園活動で，ある学年の教科との関連が図れる内容については，事前活動の中で学習し，実際の活動で生かせるようにした。

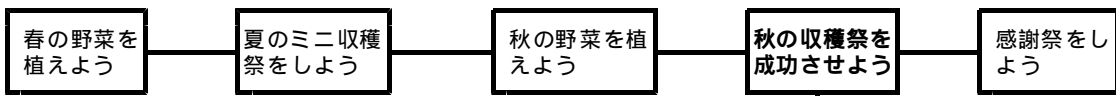
右図は、6年の複雑な面積の学習の応用例で、ある地区の畑に必要な苗の計算の場面である。面積に対する畝の数と苗の間隔などを考慮しながら計算した。このような事前学習例には、収穫の時期の収穫量の計量や数量計算、植え付けるときの間隔の取り方、収益金の計算等の例がある。



(2) 活動の展開

ここでは、11月に全校で収穫を祝う収穫祭に向けての例で紹介したい。

下図のように、単元「秋の収穫祭を成功させよう」と題して、各地区が創意工夫を生かしながら取り組みをした。実践では、各教科・特別活動との関連を図りながら進めた。



<教科の学習を農園活動に生かす。農園活動を教科に生かす。>

学年	国語	社会	算数	理科	音楽	図工	家庭	体育	道徳	特活
低学年	収穫祭でのプレゼント・販売での音声表現活動	農業の喜び・商店の工夫	収穫量を数える	秋の植物の様子と種	必要に応じて、模擬店のBGMの工夫	看板・ちらし等で効果的なデザインの工夫	安全な調理・予算と会計	自分の力に応じて収穫し運搬する。学年に応じて鎌等の道具を安全に使う。	・自立 ・感謝 ・自然愛 ・信頼 ・創意 ・郷土愛 ・責任感 ・勤労	地区の異学年集団での話し合い・計画立案・実践・反省
中学年		地域の特産	収穫量を重量で計量する	天候と実や種のでき方						
高学年			面積あたりの収穫量							

具体的な実践は、各地区で異なるので、ある地区の活動計画例を紹介したい。

ア 3区「秋の収穫祭を成功させよう」活動計画(13時間扱い)

期日・時間	場所	活動内容	支援	指導者・協力
10/13(土) 1~3校時 (午前8時~)	畑 公民館	・草取り ・人参間引き ・収穫祭までの活動計画の話し合い	・農園指導者からの助言 ・必要なことと時間の制約について	・地区担任 ・農園指導者
10/23(火) 1校時 (午前8時~)	畑 公民館	・草取り ・人参間引き ・小豆収穫 ・模擬店の話し合いと準備	・前回の活動を参考 ・小豆の取り方の指導 ・学年に応じた創意工夫を	・地区担任 ・農園指導者
10/26(土) 1~3校時 (午前1時~)	畑 公民館	・たまねぎ苗植え ・草取り ・小豆収穫・サツマイモ収穫 ・模擬店準備(看板等)	・たまねぎ植への仕方 ・いもの収穫のこつ ・学年に応じた発想で	・地区担任 ・農園指導者
11/16(金) 5~6校時 (午後2時~)	畑 公民館	・じゃがいも収穫 ・さつまいもバザー準備 ・模擬店準備(値札等)	・じゃがいも収穫のこつ ・計量・袋詰め等学年に応じて ・学年に応じた発想で	・地区担任 ・農園指導者
11/17(土) 1~3校時 (午前8時~)	公民館	・菊の取入れと束作り ・野菜の袋詰め ・最終点検	・菊の切り方や束ね方 ・計画表で最終確認	・地区担任 ・農園指導者 ・保護者
11/18(日) 4校時 (午後1時~)	小学校 運動場	・6年生テント設営 ・ヤッホー-青空市模擬店	・来店の方との積極的な交流を促す	・地区担任

次の農園活動の準備や計画については、6年生が前日までに地区児童を集めて連絡する
 農園活動の反省は、活動日の翌日に反省カードに記入する
 6年生は、農園活動の具体的計画のために、学年のヤッホータイトムから計画の時間を事前に1時間とる
 6年生の地区担任との打ち合わせは、休み時間に行い、農園指導者とは、各地区に帰ってから行う

イ 指導者・協力者

農園学習では、児童はもちろん、地区担任もほとんどが農業に関しては素人である。そこで各地区の農業のベテランの方に指導をお願いしている。指導に当たっては、児童の力で活動できるように、初めての活動以外の作業はできるだけ自分たちできるように心がけている。上記の3区の例では、間引きや草取り、小豆の収穫は自分たちでできるようになり、自分たちで役割を分担し主体的に活動している。

ウ 児童の活動状況「秋の収穫祭を成功させよう」から

(ア) 知の総合化と主体性の育成から

右写真は、3年生児童が算数の学習で計量の仕方を学んだ後、農園活動で実際に収穫物を計量し、袋詰めしているところである。初めは不安気であったが、何度も測って自信をつけることができた。



このように、教科で学習したことを実際の活動に生かした場面としては、図工のデザインを応用した模擬店の看板作り、家庭科で収穫物の安全な調理、収益の会計、販売宣伝での国語の表現活動等があり、生き生きと活動した。

また農園活動をすることで逆に教科に戻ることもあった。「落花生の実が、どうして地下でできるのか。」のように、5年生理科の植物単元の発展学習として扱うことができた。農園活動で発見したことを課題として取り上げることで主体的な学習へとつながった。

さらに、収穫祭までの取組全体を振り返ることで、次年度は何を栽培するか、どんな調理加工をするか等の構想が生まれ、農園活動自体への主体性も育ってきている。

(イ) 道徳性の育成から

ヤッホー農園の場は、働く場であり、自然とのふれあい、人々とのふれあいの場である。活動の場は自ずと道徳性を高める場になる。

特に高学年は地区別の異学年集団のリーダーとして、活動日の計画を農園指導者と連絡を取りながら立案し、作業を学年に応じて割り振る。活動日当日は、活動の進行役でもあり、力仕事も引き受ける。活動を通して、責任感や地域との連携、計画の大切さを学んでいる。低学年も、高学年にやさしく教えられながら、集団行動の約束や協力の大切さを学んでいる。



農園指導者をはじめとする地区の人々との関わりの中には、昔からの農作業の知恵や地域での販売の時に温かく接してくれる人々の姿がある。活動を通して、郷土愛や先人の知恵、高齢者への感謝の心、礼儀正しさを学んでいる。

(ウ) 体力の向上から

農園活動が始まった4月当初は、慣れない作業の連続であった。高学年は、鍬の扱い方を教えてもらったものの、すぐにくたびれて友達と交代することが多かった。低学年は、草取りの単純作業に飽きて、遊び出す子も多かった。

しかし、繰り返し活動することや1学期の収穫、販売、調理の体験をすることで意欲が湧いてきた。収穫祭の頃は、低学年は丁寧に人参の間引きをしたり、高学年は鍬を上手に使っ

ていもの収穫をしたりと、作業技能を高めながら根気強く活動するようになってきた。

(3) 事後指導

収穫祭の後、12月に地区毎の感謝祭を設定した。学級の道徳の時間や地区別話し合いでこれまでお世話になったことを振り返り、農園指導者や地域の方を招いて、収穫を喜び、感謝の気持ちをあらわした。

さらに今後の活動では、3月に次年度の農園企画会がある。収穫祭の活動を振り返り次年度の活動に生かしたい。

3 体験活動のための体制

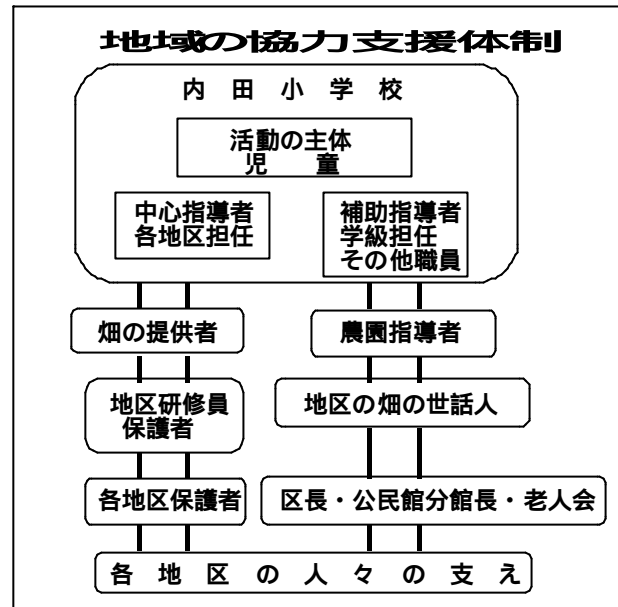
(1) 地域との連携について

ヤッホー農園活動は、まだほとんど前例のない活動である。活動が始まる平成12年度は、保護者や地域の方に地区別農園活動の趣旨について理解してもらう機会を数回持った。

その後、右図のように組織作りを行い、農園指導者を探し、畑の確保をした。

(2) その他

農園活動時の救急体制として、畑の近くの家庭に緊急避難所をお願いしたり、畑からの連絡網を整えた。また、雨天時の緊急連絡等は、オフトーク放送（電話回線を用いた町の広報システム）を利用している。



4 活動の成果

12月の感謝祭の後の調査では、8割以上の児童が「農園活動で教科の学習が役立った。」「地域でのあいさつができるようになった。」「農作業が長くできるようになった。」「と回答している。

児童の声から

感謝祭で、農園指導者や地域のみなさんに喜んでもらえてよかったです。これまで、いろいろ教えてもらって、苗の植え方、育て方には自信がついたような気がします。くわやみつまた、かまの使い方も分かってきました。私だけの畑を作って、野菜を作ってみたいです。

農園指導者の声から

初めは分からないことが多い子どもたちでしたが、野菜の成長、収穫、販売と活動を重ねる度に子どもたちの意欲が増し、よく働き、よく考え、用具の扱いも上手になりました。感謝祭では感謝状も戴きました。辛いこともありましたが、それを乗り越えて成就の喜びと自然の素晴らしさに感動したようです。こんな子どもたちと一緒に活動できて感謝しています。

このように、活動を通して子どもたちが、生き生きとしてきたことが大きな成果である。また、活動の場を学校から各地域に移したことで、地区の畑が各地区と学校を結ぶ場となり、子どもたちを育てる学社融合の体制作りができたことも大きな成果である。

5 今後の取り組みの方向

(1) 子どもたちの今年度の成果と反省を生かして、来年度は更に主体的な活動ができるようになる。

(2) 知の総合化に向けて、教科との関連をさらに具体化し、実践化を図る。

【本事例活用に当たっての留意点】

児童が体験活動を通して学習する際に意欲的に取り組める条件の一つは、その活動が自分の生活や地域に関連した活動であることである。本事例においては、体験活動の場を地域の農園や公民館において地区別に活動することによって、異学年交流が進み、学年毎の役割意識も芽生え、児童は創意工夫をもって収穫祭に取り組むなど生き生きと意欲的に取り組むことができた。

このような取組を確実に行うためには、児童と地域の状況を明確に把握すること、教員などの役割分担や年間計画を明確にすること、公民館職員や農園指導者など関係者の連携を確かなものにする体制をつくることが大切である。

教科の学習を農園活動に生かしたり、農園活動で生まれた疑問を理科の学習で解決したりすることによって、学習の総合化を図る体験活動になっている。